

## 5.9 ハザード統合マップ

平成16年版報告書では、一般配布用火山防災マップの主題図となる富士山全体のハザードマップを、溶岩流、噴石、火砕流、融雪型火山泥流についての災害予測範囲を重ねて表示したものとした(図5.9-1)。

本委員会においても、各火山現象に応じて作成した可能性マップをもとに、平成16年版報告書の作成方法に準じてハザード統合マップを試作した(図5.9-2)。凡例として、溶岩流については各自治体が防災計画において必要なリードタイムを図から判読できるよう3時間以内の到達範囲(特に緊急に避難を要する範囲)及び24時間以内の到達範囲(火口の位置によっては早めの避難が必要な範囲)を表示している。

なお、溶岩流などの到達範囲を詳細に示すドリルマップは、平成16年版報告書では一般配布用マップでなく防災業務用マップとして収録し、用途に応じて活用できるようにしているが、本委員会では、火山現象の正しい理解につなげるため、ドリルマップの効果的な活用を今後の課題として整理した。

富士山が噴火しそうな時には、公的機関からの情報に注意し、  
万が一に備えて避難の準備をする等、適切に行動しましょう。

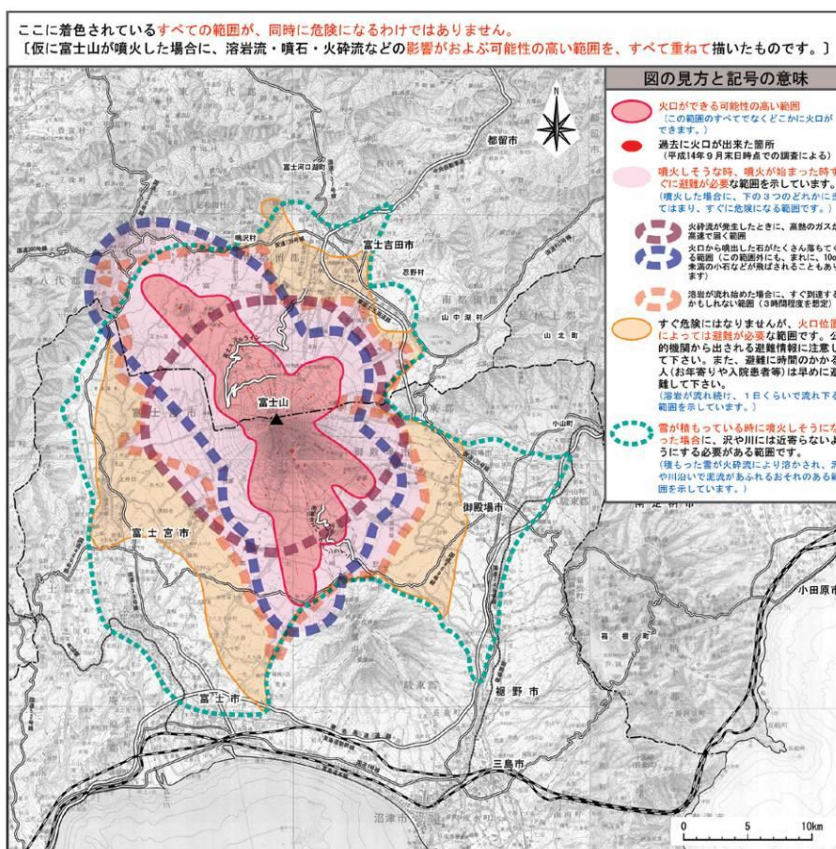


図 5.9-1 富士山ハザード統合マップ(平成16年版報告書)

ここに着色されているすべての範囲が、同時に危険になるわけではありません。〔仮に富士山が噴火した場合に、溶岩流・大きな噴石・火砕流などの影響がおよぶ可能性の高い範囲を、すべて重ねて描いたものです。〕

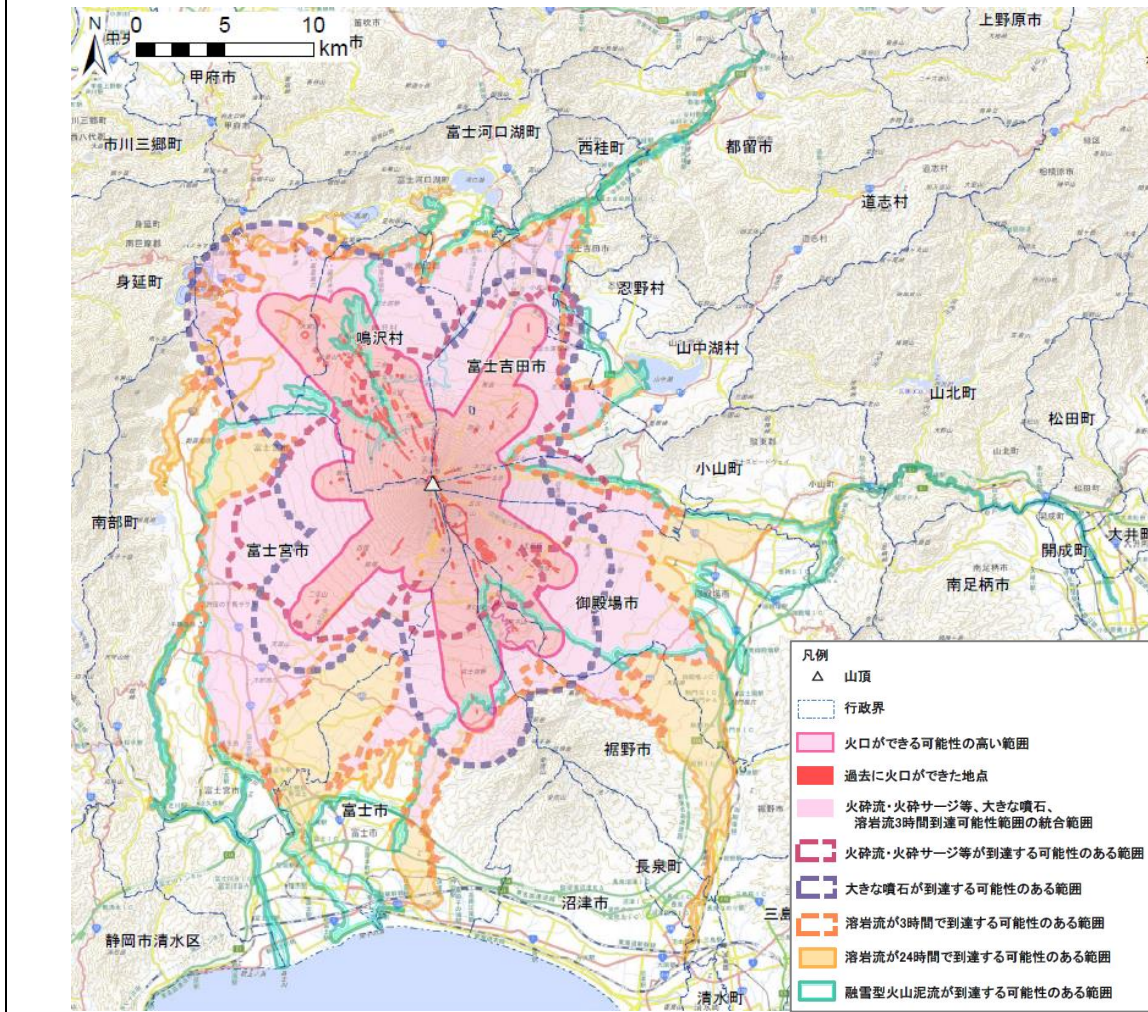


図 5.9-2 富士山ハザード統合マップ（本委員会にて作成）

図の見方と記号の意味（平成 16 年版報告書に準じた記載）

△	山頂	行政界(市町村境界)
	火口ができる可能性の高い範囲（この範囲のすべてでなくどこかに火口ができます。）	
	過去に火口ができた地点(令和3年3月末時点までの調査で判明しているもの。)	
	噴火しそうなる時、噴火が始まった時すぐに避難が必要な範囲を示しています。 (噴火した場合に、下の3つのどれかに当てはまり、すぐに危険になる範囲です。)	
	火砕流が発生したときに、高熱の噴出物やガスが高速で届く可能性がある範囲	
	火口から噴出した大きな岩がたかさん落ちてくる範囲 (この範囲外にも、まれに、10cm未満の小石などが高速で落下することもあります。)	
	溶岩が流れ始めた場合に、すぐ到達するかもしれない範囲(3時間程度を想定)	
	すぐ危険にはなりません、火口位置によっては避難が必要な範囲です。公的機関から出される避難情報に注意してください。 また、避難に時間のかかる人(お年寄りや入院患者等)は早めに避難してください。 (溶岩が流れ続け、1日くらいで流れ下る範囲を示しています。)	
	雪が積もっている時に噴火しそうになった場合に、沢や川には近寄らないようにする必要がある範囲です。 (積もった雪が火砕流により溶かされ、沢や川沿いで泥流があふれるおそれのある範囲を示しています。)	

## 引用文献

浅井 良純・石垣 泰輔・馬場 康之・戸田 圭一（2009） 高齢者を含めた地下空間浸水時における避難経路の安全性に関する検討, 水工学論文集, 第 53 卷, p.859-864.

鈴木 建夫（1985） 有珠山 1977 年降下火砕物堆積物の渦動拡散モデルによる解析, 火山, 30, p.231-251.

宮地 直道（1984） 富士火山 1707 年火砕物の降下に及ぼした風の影響.火山, 29, p.17-30.

富士山考古学研究会編（2020） 富士山噴火の考古学 火山と人類の共生史, 吉川弘文館, p.345.